国際交流学習開発部会
実践報告

研究の実際

【幼稚園実践例】

（1）1・3歳児もも組の実態

3歳児もも組の実態を平成15年5月に実施した保護者へのアンケートの結果から見てみる。

○コミュニケーション能力に関するもの

・　家庭で友だちと遊ぶ機会がありますか?ついて

多くあるが20%・時々あるが40%・ほとんどない，ないが40%である。

・　自分の思ったことを言葉で伝えることができますか?について

96%の子どもたちが相手に言葉で伝わるように話せている。

・　今までに外国の方とかかわる機会がありましたか?について

多くあるが8%・時々あるが30%・ほとんどない，ないが62%である。

○多文化・異文化理解に関するもの

・　外国の昔話や民話を話して聞かせる機会がありますか?について

時々あるが78%・ほとんどないが22%である。

・　日本の昔話や民話を話して聞かせる機会がありますか?について

多くあるが17%・時々あるが35%・ほとんどないが48%である。

・　日本の楽器に触れる機会がありますか?について

時々あるが17%・ほとんどないが39%・ないが44%である。

アンケート結果から考えて子どもたちの多くは，家庭では，友だちとのかかわりは少なく家族とのかかわりが人とのかかわりの中心となっている。このことから3歳児の頃には幼稚園が友だちとのコミュニケーションの能力を育む大切な場になっていると考える。

また，家庭の中では絵本の読み聞かせなどを通して外国の文化に触れる機会はあるが，子どもたちの生活の中には自国の文化に触れる機会が少ないことがわかった。そこで幼稚園においてできるだけ自国の文化に触れられるよう意図的に活動を計画していきたい。

また，自国の文化だけではなくいろいろな環境を準備しかかわりを広げたり，深めたりできるようにすることが大切だと考える。

（2）事例1

①ねらい

・　ものとのかかわりを通して友だちとのかかわりを楽しむ。

・　自分の思いや考えを言葉で話し，友だちと楽しさを共有する。

②保育者のかかわり

○　環境構成

・世界地図や地球儀を保育室に準備する。

・保育室にある遊具や飼育物などにひらかなと英語で名前を書いておく。

○保育者のかかわり・援助

・子どもたちの会話に心を寄せ大切にする。

・子どもたちがより関心がもてるように，友だちのつぶやきや会話の様子を知らせる。

・子どもたちがかかわっているのに出会ったときは，その場に加わり子どもたちと一緒に会話を楽しむ。

③とりくみ

～世界地図を見ながら～

世界地図を保育室に掲示して2~3日過ぎた日

O「先生　これなあに?」

T「世界地図だよ，地図って知っている?」

O「知っているよ。道を教えてくれるぶんだよ」

T「そうね，よく知っているね」

k「車で行った時に見たよ，お父さん持っとったよ」

O「見たことあるね」

O「でも，違う?前に見たのと違う」

T「そうね，この地図は道を知らせる地図とは違うのよ。これはいろいろな国のある所を教えてくれる地図なのよ」

O「いろいろな国を教えてくれるの?」

k「じゃ，龍君(9月に一週間，園生活を一緒に過ごしたアメリカの友だち)の家はどこ?」

T「龍君の家はどこだったかな?」

k「アメリカ」

T「アメリカはここよ」といいながら，アメリカを指さす。

O「そうか?」

O「じゃ，僕の家はどこ?」

T「ここよ」と日本を指差す。

S「僕の家は?」

T「ここよ」と日本を指差す。

k「○○君の家は?」

T「ここよ」と日本を指差す。

O「おかしいな?どうして同じ所なの?」

S「僕の家と○○君の家は違う所に在るのにね」

k「変だな?」

T「皆は同じ国の中に家が在るから同じ所を押さえたの」

S「同じ国?」

k「そうよ」「わかった。日本でしょ」

<考察>

・子どもたちは絵本を見るのと同じように地図の前にときどき集まって話し親しむ姿が見られた。子どもたちには違和感なく受け入れられたと感じた。

（3）事例2

①ねらい

・　日本の昔話や民話の紙芝居や絵本の読み聞かせを活動や遊びの中に取りいれる。

・遊びや意図的な活動を通して自国の文化に触れたり，かかわったりすることを楽しむ。

②　保育者のかかわり・援助

・ 保育の中で出来るだけ多くの絵本の読みきかせや，口演童話を取り入れいろいろな文化に触れられるよう保育・活動を計画する。
・ 子どもたちが楽しめるよう，いろいろな活動ができるように教材の工夫をし，一緒に活動に取り組んだり，遊んだりして楽しさを共有出来るようにする。
・ 子どもたち一人ひとりの思いや考えを表現する姿を大切にするようにかかわる。
・ なりきったり，自分らしく表現している姿見守り，楽しく遊んでいる雰囲気を大切にする。

③とりくみ

～おむすびころりんの昔話より～

絵本の読み聞かせ以後数日が過ぎた。弁当のときウインナーを落としたA男が「ウインナーころりんすっとんとん」といいながら落としてウインナーを拾っているのをきっかけにリズム劇へと活動を広げていった。

だが，３歳の子どもたちには動きながらあらすじを取り入れていくことが難しく一人二人と遊びをやめていく子がみられた。そこで，リズム劇をする前に「おじいさんが畑にやって来ました。」とまず保育者が物語のはじめを話した。そして次からは子どもたちから続きの話を引き出すように「次はどうなるのかな？」の声賭けをしたり，話が続いた時には「すごい，よく覚えているね。」とか「そうだったね。ちゃんとおぼえているんだね。」などしっかり一人ひとりを認めたり、誉めたりしながら話の内容をつないでいった。また、ある時は保育者が絵本の内容を話しながらどの場面もみんなで表現して遊んだ。この頃からリズム劇の中でおむすびが転ぶ場面になると子供たちの中からリズムに合わせて「おむすびころりんすっとんとん，おむすびころりんすっとんとん」と歌うようになった。子どもたちもおじいさんになったり，おむすびになったりと次々と出てくる登場人物になって楽しんだ。回数を重ねる中でなりきったり，自分なりの表現を楽しむようになった。又，友だちの表現の仕方を見て自分なりの表現を３歳児なりに考え始めた。表現を楽しむようになった頃，少人数でリズム劇を行い友だちが行っているのを見たり，友だちに見てもらったりといった活動をとりいれた。この頃によりクラスのみんながリズム劇を楽しみ始めたように思えた。

～お面づくり～

リズム劇を楽しみ始めた頃，三角のおむすびのお面をひとつ作って机の上に置いておいた。するとT男が「僕、これがほしいな」と言って来たので作ることを持ちかけてみた。すると2,3人がつくり始めた。このとき一人の子どもが「梅干を入れたのを作ったよ」といってみせてくれた。この日みんなにこのことを話し，おむすび作りのきっかけになった。次の日，どんなおむすびがあるのかをみんなで話し合った。「ごま」「しゃけ」「こんぶ」「のりまき」「うめぼし」「たらこ」「エビフライ」「おかか」「にく」などいろいろなおむすびのあることを知った。そこで画用紙に三角や俵がたを書いて置いておいた。子どもたち自分の好きなお結びにする子，知っているものを全部書いたおむすびなどができた。これをかぶってリズム劇を楽しんだが，お面は家族に見せたいといってその日に持って帰った。

<考察>

・自国の文化大切にするためには，まず子どもたちが楽しく遊びに取り組めることが必要である。

（4）とりくみをおえて

・事例１の取り組みでは世界地図を保育室に掲示することにより見られた姿である。保育者は掲示する前まで幼稚園に世界地図なんてと考えていたが子どもたちは絵本と同じようにかかわり自分たちに合ったか

かわり方を見つけていっている。こうした姿からこどもたちがそのものに積極的にかかわり自分たちにふさわしいものにしていくのではないかと感じた。

・子どもたちは沢山の疑問を感じながら少しずつ自分なりのかかわりを持ちながら大きく育っていくのだと考えた。

・事例２の取り組みでは自国の文化に触れてほしいと考え取り組んだが子どもたちが活動を楽しむまでには，押し付けや無理やり引っ張っていったところもあり教材の工夫が足りなかったことを反省する。お面作りをする頃には子どもたちも積極的に遊びに取り組む姿が見られたように思えた。しかし子どもたちは本当に自国の文化を感じることができたかは疑問である。こうした遊びや活動を繰り返し体験することによって自国の文化の伝承ができ，心が豊かになっていくのだと考える。

【小学校の実践例】

（1）小学校1年生

①単元名　　「アフリカとなかよくなろう」

②単元のねらい

○アフリカからの研修生のかたがたとの交流を通してアフリカの人に親しみを持つことができるようにする。

○アフリカの遊びやお話などに親しむ活動を通して、アフリカの人やアフリカの文化に興味を持ち、それらを受け入れようとする心情を育む。

③単元計画

第1次　アフリカってどんなところかな・・・・4時間

　　アフリカってどんなところかな・・・・1時間

　　どうすればなかよくなれるか考える・・2時間

　　アフリカの昔話を聞こう　・・・・・・1時間

第2次　アフリカの先生となかよくなろう・・・・2時間

（そのほか、図工で国旗の色塗りやプレゼントにする絵カードの作成をしたり、学活で交流会の準備を行ったりしている。）

④授業の実際

このとり組みは、仏語圏アフリカからJICAの研修生（9カ国12名）として来日された方々との交流会とそれに向けての事前学習を学習の場とする。この活動を通して、事前学習では、アフリカの文化などに興味をもち、それらを受け入れる心情を育む。当日の交流会では、言葉の通じない研修生の方々とボディーランゲージなどで意思の疎通を図ろうとし、アフリカの方々に親しみをもって楽しく交流することをねらいとする。

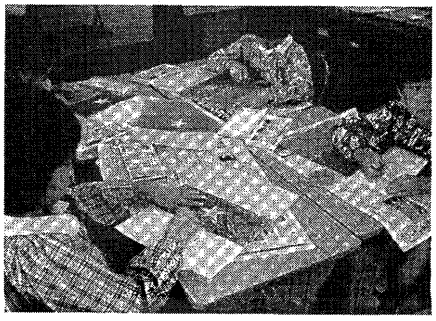
ア　アフリカとはどんなところかな

子どもたちには、導入として「カリンバ」という楽器を紹介した。まずは音だけ聞かせてそこからのイメージを語らせた。「鉄琴みたい。」「木琴みたい。」と大きな楽器を想像していたが、実際にその楽器を見せると、どうして小さい箱みたいなものからこんなに響く音が出るのだろうかと不思議そうな反応を示していた。

その楽器が生まれた場所がアフリカというところであることを世界地図で示し、アフリカにあるいくつかの国々から本校に来られるということ、そして、その先生方（研修生の方々）は1年生と交流することを楽しみにしていることを伝えた。

イ　どうすればなかよくなれるかな

どうすればアフリカの先生方となかよくなれるのか、子どもたちは考え、「握手をしてお迎えする」「歌を歌いたい」「一緒に遊びたい」などの意見が出た。そこで、アフリカの先生方と何をして遊びたいかの希望をとり5人～8人くらいのグループを作り、1つのグループにひとりずつアフリカの先生方に入って頂くことにした。子どもたちが一緒に遊びたいことは「こま回し」「折り紙」「おもちゃ作り」「けん玉」「歌」「絵を描く」「めんこ」などであった。そして、グループごとに、言葉の通じない先生方にどんなことをどんな風に伝えたらいいか話し合いをして考えた。



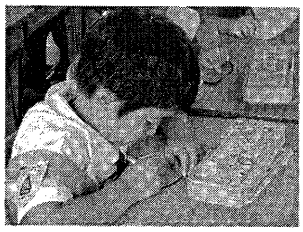
ウ　アフリカの昔話を聞こう

国立民族学博物館の特別展「西アフリカのお話村」のHPによると、アフリカの人々は夜にみんなが集まって昔話を聞くことをとても楽しみにしているという。そこで、アフリカの人の気持ちになってお話を聞くという活動を行った。また、そのＨＰにはアフリカの人は「バオバブの木」が大好きで昔話の中にも宝の木として出てくるということが紹介されていた。子どもたちは、バオバブの木とはどんな木なのか想像したり実際に写真を見たりしてイメージをふくらませた。子どもたちの感想は「教室を暗くして聞いたので、少し怖いと思ったけれど、みんなでお話を聞くから楽しかった。」「出てくる人の名前が聞いたことのない名前でとてもおもしろいと思った。」というように夜に人が集まってお話を聞くことの楽しさを感じたり、アフリカならではの登場人物の名前の響きに新鮮さを感じたりしているようだった。

エ　そのほかの交流会に向けての準備

９カ国からいらっしゃるので、会場に飾るためにそれぞれの国旗の色塗りをした。子どもたちは自分たちが色ぬりする国旗がどんな国の国旗なのか興味を持ちながら丁寧にぬっていた。また、学校生活の中で「自分が今がんばっていること」「今楽しいと思っていること」についての絵を描いた。

子どもたちは、プールの様子やタイヤ飛び、サッカーやドッヂボールをしているところなどをクレパスやカラーペンなどで描いていた。また、グループごとの交流で、研修生の方にどうやって伝えるか葉っぱの形をかたどったカードに記入した。



＜子どもたちのカードより＞

○　けんだまをするときは、ぺえすをあわせてする。

○　おもちゃづくりでは、くるまやすとろうのでんわやいろいろなおもちゃのつくりかたをおしえたい。

○　めんこをたたくときにつよくたたくとかぜがおこるからそこをおしえてあげたい。

オ　アフリカの先生方となかよくなろう（交流会）

交流会は、次のようなプログラムで行われた。

・あいさつ	・グループごとに先生方と
・はじめのことば	・プレゼントわたし
・歌によるお迎え	・アフリカの先生方より
・先生方から自己紹介	・ふり返り
・ゲーム（かもつ列車）	・おわりのことば

子どもたちは、研修生の方々が入場してきたときも自己紹介でこれまで聞いたことのない響きのことばに接したときも、びっくりしている様子だった。しかし、一緒にかもつ列車をするときには少しずつ緊張が解けている様子だった。

グループごとの活動では、遊びに夢中になってしまう人、どうやって説明しようか考えながら研修生と接している人もいたが、事前にどんなふうに伝えたいかを考えていたこともあり、緊張しながらもそのことを意識して活動しようとする姿がみられた。

＜子どもたちの感想より＞

○あまり　やりかたとかを　おしえられなかったけれど、さいごに　いっしょにつくったせみのおりがみの　えを　わたすことができて　とてもうれしかったです。
○こまのひものまわしかたを　ゆっくり　おしえてあげたよ。
○いっしょにあそぶことができて　たのしかった。あそんでいるとき　ぼくのはなしていることが　わかってくれていたみたいだった。

＜研修生の方々の感想より＞

○言葉が通じないのに、子どもたちは、折り紙と絵で働きかけてくれた。しゃべらないのに順番でコミュニケーションできていた。言葉を使わなくてもコミュニケーションができるということに感動した。
○他の国では、子どもたちがアフリカ人を見ると母親の後ろに隠れるが、ここの子どもたちは積極的だった。自ら働きかけようとする姿勢があった。平和を構築するという意味で、日本の教育に期待している。
○グループ全体としての活動がなされ、単なる遊びではない授業であった。今回の授業のタイトルを私がつけさせてもらうならば、「Peace in the world（世界の中の平和)」になる。

⑤とり組みの成果と課題

・事前の学習で楽器や昔話を紹介したら、とても興味をもっていた。その後空いた時間に楽器をならす子どもの姿もみられ、様々な感覚を働かせて「アフリカ」を感じることができた。
・国旗の色ぬりをすることで、特に自分がぬった国の旗に親しみを感じている様子が伺えた。アフリカの先生方も自己紹介で子どもたちが色ぬりした国旗を指さしながら説明してくださっていた。
・研修生の方々が子どもたちの伝えようとすることをくみ取ろうとしてくださっていたためか、「にほんごではなしてわかってくれた」という感想が多く、子どもたちも安心してかかわりをもとうとしていたことがそこからも伺える。こういう経験を積み重ねていけば、言葉によるコミュニケーションをもっととっていきたいという気持ちがもてるようになると思われるので、海外の方々との活動の機会を積極的に仕組んでいきたい。
・　子どもたちは、グループごとの活動でゆっくり教えようとしたりやって見せたり、一緒に楽しんだりしていたが、その遊び自体の経験がまだ充分でなく、どうすればいいかお互いに戸惑っている様子もみられた。1年生が海外の方と交流するときにどのような形態をとれば発達段階にあったものになるのか検討する必要がある。

（2）小学校5年生

「コミュニケーションスキルの向上」をねらいとした5年9学級〔指導者T1…中山貴司（HRT）　T2…松尾砂織（JTE)〕での実践を報告する。まずは、この単元について述べ、その後、授業の実際、成果と課題について述べる。

●単元について

① 学　　年　　第5学年9学級　39名
② 実施時期　　平成15年11月～平成16年2月
③ 単 元 名　　中3のペアのお兄さん、お姉さんと英語で話をしよう！

④ 研究の視点

〔単元観〕

本単元は、本学園中学校第３学年のお兄さん、お姉さんたちと英語で話しをしようというものである。その過程では、中学校第３学年のお兄さん、お姉さんと英語でどんなことを話したいか決定し、会話をするとき（人とコミュニケーションをするとき）に大切な要素について話し合い、この単元のために中学生たちが作成してくれた「英会話学習ビデオ」（10 本）を見ながら英会話を学習していく。本単元の特徴をまとめるならば、次の３つにまとめられる。

・第５学年の子どもたちが英語を使って話す相手は、幼稚園年長のときからペアを組んできている本学園の中学校第３学年の子どもたちである。

第５学年の子どもたちと中学校第３学年の子どもたちは、６年間ペアを組んでおり、運動会などの学校行事や総合的な学習の時間などで交流を深め、兄弟姉妹と感じられるほど親しい関係が成り立っている。

・本単元で学習する英会話の内容は、子どもたちのアンケートや話し合いで決定したものである。

第５学年の子どもたちが中学校第３学年のお兄さん、お姉さんと英語で話したい事柄をアンケートや話し合いによって決定することで、英語を学習しようとする意欲をわかせる。

・英会話を学習していく過程で、中学校第３学年の子どもたちが作成した「英語入門期の学習者向け英会話学習ビデオ」を用いる。ビデオで話されている英会話の内容は、第５学年の子どもたちが英語で話したいという事柄をもとに、指導者が作成した。ビデオの監督・演出・出演などは全て中学生である。例文を作成するにあたっては、①潤滑油となる英語表現を取り入れること、②何を話しているのかできるだけ推測しやすいよう、カタカナ英語を取り入れること、③複数人（4 人）による英会話を成立させること、の３点に留意した。

〔児童観〕

本年度初めに行った「国際交流部会アンケート」では、次のような児童実態が見受けられた。

・相手の話を聞くことはできるが、自分の考えを話すことが好きではなく、できないと答えている子どもが半数近くいる。

・外国の言葉を話せるようになりたいという子どもが９割以上で、外国の言葉で手紙を書けるようになりたいという子どもの６割を大きく上回っている。

・英会話を今まで全く学習したことがない子どもが半数以上いる。

〔集団観〕

これまでの TT によるオールイングリッシュの英会話活動を振り返ってみて、恥ずかしいからか英語をはっきりと発声することができにくくなっている子どもが出てきている実態がある。それを改善するために次のような取り組みを学級集団として行っていきたい。

・グループでの英会話活動を仕組み、1 人ひとりが英語で話す場面を増やすとともに英語を話すことへの抵抗感を取り除いてやる。

・コミュニケーションとは、相手の考えを分かろうとする活動であることを常に意識づけ、相手を思いやるコミュニケーション活動を大切にさせる。

〔指導観〕

指導にあたっては、主に次の３点に留意していく。

・英会話練習を始める前に、人とコミュニケーションをするときの大切な要素について話し合う。

・事前に次の学習内容を知らせ、「私は、～（スポーツ等）が好きです。どうしてかというと、・・・。」など英語で話せる状態で授業にのぞむよう調べ学習的な要素を取り入れる。

・中学校第３学年のお兄さん、お姉さんと英語で会話をする活動では、楽しくコミュニケーションを行

うだけではなく、感謝の気持ちが伝えられるような活動も行う。

⑤単元の目標

○中学校第３学年のお兄さん、お姉さんたちと英語で話をすることに興味をもち、英語によるコミュニケーションを楽しもうとする。

○自分が話したいと思っている内容を英語を使ってはっきりと話したり、話し合い手の考えを聞いたりしようとし、会話を続けて話そうとすることができる。

○自分が話している英語や相手が話している英語をしっかりと聞いて、その意味を理解することができる。

○指導者が話していることやビデオの中で話されている内容を、話し振りや周りの状況、知っている単語などから推測しようとする。

○中学校第３学年のお兄さん、お姉さんに感謝の気持ちをもつことができる。

⑥単元計画

第１次　中学校第 3 学年のお兄さん、お姉さんと英語で話すことを知り、どんなことを話したいか話し合う。(1 時間)

第２次　話したい内容を整理し、人と会話をするときに必要な要素について話し合う。(1 時間)

第３次　話したいことの内容をもとに、英語によるコミュニケーション練習を行う。(11 時間)

〔内容…好きな動物、スポーツ、食べ物、趣味、将来の夢等〕

第４次　中学校第３学年のお兄さん、お姉さんとの会の計画を立て、準備をする。(3 時間)

第５次　今までの活動を振り返る。(1 時間)

●授業の実際

研究会当日に行った第三次の５時間目の授業を取り上げる。

①本時の目標

○ 英語によるコミュニケーションを楽しもうとする。

○ 好きなスポーツについて友だちと英語で話したり、友だちに尋ねたりすることができる。

○ 複数人による英会話場面で、続けて会話をすることができる。

○ 身体を使って伝えたいことを表現し、相手の話している内容を分かろうとする。

②授業の実際

授業のはじめでは、心身をリラックスさせ、ボディーランゲージをしやすい雰囲気作りをするために「ジェスチャーゲーム」を取り入れた。これは、指導者が提示したスポーツの名前を、各グループ（１グループ３～４人で、10 グループある）の中の１人だけが知り、それを 10 秒間ジェスチャーし、同じグループの他の子どもが何のスポーツかあてるゲームである。ジェスチャーの中身は、動物であったり、食べ物であったり、授業で取り上げるトピックと同じものを選択している。本授業のトピックは「スポーツ」であったので、①バスケットボール②相撲③バレエ④シンクロナイズドスイミングを取り上げ、４回ゲームを行った。子どもたちは笑いながら、楽しい雰囲気の中でゲームを行った。ジェスチャーがよくでき

ていた子どもには、“Please do gesture！”と言って、全員の前でジェスチャーをさせ、ボディーランゲージをすることに対する抵抗感を取り除いた。

次に、好きなスポーツについて英語で発表させた。子どもたちは、事前に自分が好きなスポーツについて、教師や家族、友だちに英語での話し方について尋ね、練習してきているので自信をもって話すことができた。“I like baseball. Because I like hitting home runs.”“I like tennis. Because I can enjoy with my family.”“I like soccer and table tennis. Because they give me courage.”など、すぐに意味が推測できるものやなかなか意味が推測できないものなど多様な英語構文を使って子どもたちは話した。すぐに意味が推測できるものに対しては、“O.K.”“Oh,good.”など受容表現で反応した。しかし、意味が推測できないときは、子どもだち同士で互いに“Once more, please.”“In Japanese？”と反応を返し、全員でその意味を確認して言った。また、自分と同じスポーツが好きだと友だちが発表したときは、“Me,too.”と言いながら、席を立ち、友だちに続いてその理由について話した。このように友だちが英語で話したことに対し、何らかの反応を必ず返そうとする態度は、本単元を通して継続的に行うことができた。

その後、何のスポーツが好きなのか尋ねる英語表現を、自然な形で子どもだちに身につけさせるために、指導者の方から段階的に質問をしていった。“(T) What color do you like？”“(S) I like blue.”“(T) O.K. What sports do you like？”“(S) I like basketball. Because I like shooting.”それまでに好きな色について尋ねる英語表現は知っていたので、“color”を“sports”に変えて尋ねると、構文を説明する必要もなく、子どもたちはその意味を理解したようであった。続いて、好きなスポーツについて尋ねるときは、“What sports do you like？”と話すということを説明し、数回T２に続いて発声練習し、ペアでお互いに尋ねて答えるという活動を行った。

続いては、中学校第３学年のお兄さん、お姉さんが作成したビデオ（約５分）を用いての学習を行った。ビデオは、①4人で話している英会話を聞いて会話の意味を推測する②英会話に出てきた単語の発声練習をし、その意味を知る③英会話の日本語訳を知る④英会話に出てきた重要基本文型の発声練習をする⑤英語クイズに答える、という流れで作られている。ここでは、①を３回繰り返して子どもたちに見せ、その英会話内容を推測させた。ビデオに出てくる生徒たちは英語を話しながら、ボディーランゲージをあわせて行っている（例えば、“I like basketball.”と言いながら、シュートする格好をする等）のでその日本語訳は子どもたちには比較的わかりやすいものだったようである。４人による英会話の中には、“Me？”“Oh、good.”などの英語表現もあったが、それも子どもたちは聞き取ることができたようであった。推測させた後は、③を見せ、その日本語訳を知らせた。そして、④を見せる前に、各グループ内での英会話練習を行わせた。

この４人による英会話は、本授業の中で最も大切な活動であると位置づけている。そのため、グループでの練習時間をたっぷりととってやり、全体での発表場面では５グループに発表させた。“Nice to meet you.”“Nice to meet you, too.”“What's your name？”から始まり、今まで学習した英語表現を

駆使しながら、“Me,too.”“I see.”“Me？”“Pardon?” などの会話の潤滑油となる言葉も取り入れながら、１グループ２分以上も英語による会話を続けることができた。

そして、次にビデオの④を見て重要基本文型の発声練習を行い、⑤の英語クイズでは、中学校の生徒たちが何のスポーツが好きだと話しているのかあてる活動を行った。英語クイズの後には、スクリーンに『9 学級のみんなには簡単だったようだね。』の文字が流れたり、①の英会話を推測する場面では『では、出席番号１５番の人から教えて！』の文字が流れたりするなど、中学校のお兄さん、お姉さんとのスクリーンを通したコミュニケーションも子どもたちはたいへん楽しんでいたようである。

授業の最後には、“Happy birthday song” を歌い、1 番で当月誕生日を迎えた子どもたちをクラス全員で祝い、2 番で “Happy birthday” を “Good-bye” の言葉にかえ、授業のしめくくりとした。

●成果と課題

《成果》

①英語によるコミュニケーションを学ぶことは、日本語によるコミュニケーションを学ぶことにもつながる。

本単元の学習の第２次では、コミュニケーションをする上で大切な事柄について、子どもたちと話し合う活動を行った。そこでは、①アイコンタクトで話す②自分の考えをはっきりと述べる③相手に質問をする④会話を続けようとする⑤相手に反応する⑥相手の話していることを分かろうとする、などが出てきた。これは、日本語でのコミュニケーション活動（「話す・聞く」活動）においても大切な事柄であるといえる。「小学校では、英語教育よりも日本語をもっとしっかり・・・」ということを聞くことがあるが、今回の単元を通して、コミュニケーションをする上での態度を培うのであるならば、それは英語の学習を通してでも行えるのではないかと感じた。本単元の学習中、こんなことがあった。ある子どもがある子どもに “What color do you like？” と質問した。それに対し、“I like pearl blue.” と答えた。そのとき、質問した子どもは、「それは、pearl blue じゃなくて、pale blue だよ。違うよ。」と答えた。質問した子どもは、相手が間違えて話していることを知っていながら、相手の答えを否定する発言を行った。相手とコミュニケーションをとろうとするならば、“O.K. You like pale blue.” と答えるべきではないのか。相手の話していることを分かろうとすること、日本人同士のコミュニケーションであっても大切なことである。この例は、ツールが日本語ではなく、英語であったからこそより具体的に子どもたちに、コミュニケーションとは何かについて考えさせる良い材料となった。

②英会話の学習をする上で、潤滑油となる英語表現を取り入れることにより、活発で楽しいコミュニケーション活動を行うことができる。

英会話が退屈なものとなる理由として、話したい内容はたくさんあるのに、それが英語となるとどう表現していいのかわからず、内容が陳腐なものになってしまい飽きるということがあげられる。これを改善するためには、やはり早い時期から英語を学習し、できるだけ発達段階に応じた英会話ができるようにする、ということがあげられる。しかしながら、英語を学習することが苦手だという子どもにとっては、これも苦になるであろう。子どもたちが楽しく英会話ができるようにするためにはどうしたらよいのか、その１つの方法として、潤滑油となる表現（“I see.”“Me、too.”“Oh、good.”“Great.”“Me？”“Once more Please.” など）を指導し、それを活発に取り入れながら英会話を行ってはどうかと考え実践した。これは、非常に効果的であった。日本語でも誰かが発表した後、「同じです。」「わかりました。」と話させ、友だちの意見に反応する習慣をつけさせることがあるが、英語の場合は、“O.K.”“good.”“I see.” など、多様な表現がある。潤滑油となる表現を取り入れることにより子どもたちには、自分の英語が通じたことの喜びを感じさせることができ、笑顔で楽しく英会話を行うこ

とができた。

③身近なお兄さん、お姉さんが作成した「英会話学習ビデオ」を取り入れることで、英語が話せるようになることの憧れや希望をもつことができ、複数人（４人）による英会話の良いお手本を示すことができる。

ビデオに登場してくるのは、俳優でも知らない人でもない。同じ学園の身近な人が登場し、英語を話しているのである。これによって、子どもたちには、英語が話せるようになることの憧れや希望をもたせることができたと思う。また、今まで、お世話になってきたお兄さんやお姉さんが、自分たちのために作ってくれたビデオを見ることは、子どもたちの興味をひき、感謝の芽を育てることにもなるであろう。

また、今回のビデオでは、中学生４人による英会話場面が出てくる。TT による英会話学習では、２人による英会話のお手本を示すことができても、それ以上の人数による英会話場面を示すことはできない。複数人（４人）による英会話場面を子どもたちに提示することによって、より英会話が活発化され、２人による英会話練習、４人による英会話練習など様々な英会話練習形態をとることができた。

④自分が話したい事柄の英語表現を身近な人（教師、家族の人など）に聞いて、練習してから授業にのぞむという姿勢をとらせることで、英語の日常化をはかることができ、授業に自信をもってのぞむことができるようになる。

英語を何年間も学習するのになかなか英語が話せるようにならないことの理由は、今までの教授法の問題もあるのかも知れないが、英語が日常化していないことも大きな要因であると思う。本を読んだり、人と話したりするとき、日本人は全くといっていいほど英語を使わない。英語を使わなくてもすむという便利な環境にあるともいえるが、もっと積極的に英語を使おうとするならば、英語をもっと話せるようになるのではないかと思う。また、わずか１週間に１～２時間の授業で英語が上手に話せるようになれるとも思わない。そこで、本単元では、自分が話したい英語表現に対して、調べ学習的な要素を取り入れた。つまり、本時に入る前に事前に学習内容を話しておき、例えば「自分が好きなスポーツについて、理由と一緒に話せるようにしておきましょう。」と子どもたちに伝えておくのである。子どもたちは、英語表現を誰に聞いても良いのだから、調べてもわからないということはない。こうすることによって、日常の学校生活や家での生活の中に、英語表現が取り入れられるようになり、英語の日常化を少しでもはかることができたのではないかと思う。また、そうすることによって、本授業に自信をもってのぞむことができ、英語の定着をよりはかることができた。

《課題》

課題としては、やはり本単元の中に外国の人と触れ合う場面が一度もなく、英語を話す必要性や良さを実感させることができないということがあげられる。英語を話すことができるようになることについては、外国の人と話をしなくても、英語を話すことができる日本人と話をしてもよいし、またそうした方がより日常的になりやすいという良さがある（一方では、外国の人と話すことにより、正しい発音を聞いたり、言葉の端々に文化を感じたりすることができるなどの良い面も多くあるが）。しかしながら、小学校段階にあっては、やはり実際に外国の人と触れ合い、五感全体を通してコミュニケーションをとることは必要なことであろう。コミュニケーション相手を中学校第３学年の生徒たちとしたことが、どう良い結果をもたらし、またそうでない結果をもたらしたのか再度考え直す必要がある。

【中学校の実践例】

（1）中学校1年生の実践例「単元：歌から見えてくるメッセージ」について

～学習意欲を高め、表現力をつける授業の実際～

《単元について》

本単元では、リパブリック賛歌に込められたメッセージを歴史的な側面と音楽的な側面から探る調べ学習を通して、自国の文化や身の回りの生活を振り返り、国際社会の中で生きる日本人のあるべき姿を考えることを目標とする。歌詞の中の「His truth is marching on.」に込められた歴史的背景や社会の風潮、そして音楽に込められた人々の心情を探り、歌から見えてきたメッセージに対する自分の考えを表現するために、これまで教科として学んだ英語を双方向のコミュニケーションを図るための手段の一つとして活用するための場を設定した。また、広島大学の留学生に自分の意見や考えを英語や音楽で表現したり、留学生の意見を聞いたりする活動を通して、多文化理解を深めるだけでなく、　双方向のコミュニケーション活動を意識したコミュニケーションスキルの向上をねらっている。この交流学習を通して、アメリカ民謡リパブリック賛歌に対する多種多様な考え方に触れながら、多文化理解を深めさせていきたい。よって、多文化と自国の文化および自分の身の回りのことを振り返り、今後自分たちが生きていく社会のあるべき姿を考え、ピースメッセージとして自分の意見を表現することで「日本のあるべき姿を知る」いうねらいに迫るのに適した単元であると考えた。

《指導について》

学習の第1段階として、リパブリック賛歌の歴史的背景を知る上で糸口になる10個のkeywordをグループごとに調べ、発表活動を通して、分かりやすい表現方法（日本語）の在り方を学習した。

第2段階では、調べ学習の発表を通して、興味・関心を抱いたテーマを生徒に設定させ、テーマ別グループ学習班を社会問題と音楽という二つの側面から10のグループに編成した。グループ学習の中では、その時代の人々の生き様、歌に込められた人々の心情に触れることを通して、他文化に関心を持たせるとともに、自分たちの考えを表現するためのコミュニケーション方法について考えさせる。さらに、言語に固執せず、音楽的な要素を含む表現方法があることを気づかせる指導を行う。

《単元の目標》

○ 他文化に興味を持ち、意欲的にかかわることができる。

○ リパブリック賛歌の背景を調べ、意見交流する活動を通して、自分の意見を持つことができる。

○ 自分の考えを表現するためのコミュニケーションの在り方を理解する。

《学習計画》（全20時間）

第1次　・リパブリック賛歌の歌詞と10のkeywordから歌の背景について考えよう・・・1時間

・10のkeywordを調べ、まとめよう・・・2時間

第2次　・調べたことを発表し、歌の背景を探ろう　・・・3時間

第3次　・自分の考えを持ち、表現するためのコミュニケーションの方法を考えよう・・・4時間　※図1指導過程例（本時2/2 11/17実施）

第4次　・自分の考えを表現し、相手の意見から学ぼう（中間発表）・・・4時間　※図2指導過程例（本時1/3 12/5実施）

第5次　・ピースメッセージを発信しよう（本発表）・・・6時間

《目標例》

第３次の目標

○ コミュニケーションとは何か，具体的に内容や方法を考え，自分の意見を述べることができる。

○ 意欲的に課題について取り組むことができる。

第４次の目標

○ グループで設定したテーマにそって、意見や考えを表現することができる。

○ 様々な方法で積極的にコミュニケーションをとることができる。

○ 意見交流を通して、自分の考えや意見を持つことができる。

（表 1）【指導過程例】

学習事項	生徒の活動	教師の働きかけとねらい	（集団）
1 本時の学習への導入	(1)前時の学習を振り返る。 ○同じテーマを持つ者同士からなるグループの決定 ・テーマの発表 社会問題プロジェクト 音楽プロジェクト	①前時の学習を振り返り、各グループのテーマを確認することで、課題を明確化させる。	(小)→(全) 学習課題を共有化させ、本時の活動へ意欲を持たせる。
2 学習課題の設定	(2)「テーマ」を伝えるために今後の学習が展開されることを知る。	②テーマの中身を具体化し、その効果的な表現方法をイメージさせる。	(全) 自分の考えと照らし合わせながらビデオを見せる。
	「テーマ」を明らかにし、自分たちのメッセージを伝えるためのコミュニケーション方法を考えよう！		
3 学習課題の追求 （グループ内交流）	○何を伝えるのかを具体化し発表方法について考える。 (3)グループでコミュニケーション方法を考える。 ・「人物」の紹介方法 ・リパブリック賛歌との関わり ・「社会問題」と自分たちの生活との関わり ・「音楽」とその歴史 ・歌詞から見えるメッセージ ・音楽の表現方法 ○役割分担を決め、具体的な学習計画を立てる。 ・ゴスペルを歌うために、英語の発音を確認する。 ・キング牧師のスピーチを英語で発表するために、英文を模造紙に書くなど	○より効果的なコミュニケーション方法とは何かを考えさせる。 (3)TTで各グループの話し合いの様子を観察し、適宜アドバイスをする。 ・机間指導をしながら、各班を支援する。 ・作業段階で必要となってくる資料・情報に関するアドバイスをする。 ・必要となる情報・資料を明らかにさせ、学習計画の見通しを持たせる。 ・英文にする必要性についても考えさせる。 (評)意欲的に取り組んでいるか。	(小) グループで出された意見をリーダーを中心にまとめさせる。

(発表及び質疑応答)	(4)コミュニケーション方法を発表することで、他のグループと意見交流をする。 ○コミュニケーションの方法 ・　言葉 ・　寸劇 ・　音楽 ・　朗読 ・身体表現など	④テーマを伝えるための効果的なコミュニケーション方法であるかどうかを評価させる。 (評)他者の意見を大切にしているか。 (評)留学生と交流するためのコミュニケーション方法を考えられたか。	(全) 他のグループのよさを評価する。
4 次時への発展	(5)本時のまとめをし，次時の学習内容を確認する。	⑤本時の学習について振り返らせるとともに，次時の活動内容に対する見通しを持たせる。	(個) 本時の活動を振り返らせる。

(表 2)【指導過程例】

学習事項	生徒の活動	教師の働きかけとねらい	(集団)
1 学習の雰囲気づくり	(1)ゲストティーチャーを迎えるためのスピーチをしたり、この学習のきっかけとなった歌「リパブリック賛歌」を歌う。 (2)ゲストティーチャーの自己紹介をきくことで、交流相手のことを知ろうとしたり、交流することへのモチベーションを高めたりする。	①スピーチや歌を発表させるときには、自分たちの思いが十分伝わるような雰囲気づくりをする。 ②ゲストティーチャーの自己紹介のときには、雰囲気がなごむように自国の民謡をワンフレーズ歌ってもらったり、自国の言葉で挨拶をしてもらったりする。 (評) 相手のアプローチに対して柔軟に応答することができたか。	(全) ゲストティーチャーを気持ちよく迎えたり、交流するための意欲を喚起させたりするために、しっかり歌を歌わせたり、話をきかせたりする。
2 学習課題の設定	(3)これまで活動してきたことが十分生かせることができるようにという自覚を持つとともに本時の見通しを持つ。 調べたことをもとにして留学生の先生と交流しよう！ ～自分たちのやり方で積極的にコミュニケーションしよう～	③本時の活動の見通しを持たせるとともに、そのためにできることは何かを確認する。 (評) 本時の見通しを持つことができたか。	(全)→(個) 学習課題を共有化させ、本時の活動への意欲を持たせるようにする。
3 学習課題の追究	(4)5グループに分かれ、それぞれにゲストティーチャーを迎え、英語・歌・ボディランゲージなどでコミュニケーシ	④ＴＴでグループをまわり、ゲストティーチャーとの交流の様子を伺う。とまどっているグループがあればそこでア	(小) 各グループのリーダーを中心に、一人ひとりがし

	ョンをはかる。 「Do you know Gospel？」 「Do you know Battle Hymn of the Republic? 」 「一緒“joyful joyful”の歌を歌いませんか?」 「私たちが調べた曲についてCDをきいてもらって感想を言ってもらおうよ」 「英語がよくわからないので身振り手振りで伝えてみようか？」 「日本の替え歌を聞いてもらい、原曲との違いを楽しんでもらおうよ。」 (5)各グループの「テーマ」について交流した結果わかったことや実際にゲストティーチャーと交流して思ったことなどの感想を発表する。	ドバイスをし、スムーズに交流できるようにする。 ・基本的には自分たちの力で交流することがベストではあるが、難しいようであれば橋渡しの役割を担う。 ・「社会問題」をテーマに追求したグループと「音楽」をテーマに追求したグループの2分野があるのでTTの特性を生かしてグループ指導できるようにする。 (評)自分たちの英語の力を生かして、自分たちの選んだコミュニケーション方法で交流することができたか。 ⑤交流を通して、自分たちが課題追求してきたことへの感想をもたせるとともに、交流を終えた時点での率直な感想を発表させる。その際、簡単な英語を交えながら発表させるようにする。	っかりと自分を表現し交流できるようにする。 （全）（個） 交流したことを振り返り、自分の考えと照らし合わせながら意見をきくようにさせる。
4本時のまとめと次時への発展	(6)本時の交流についてゲストティーチャーからの思いを聞いて、これからの展望を持つ。	⑥本時の感想を述べるとともに、まとめのゲストティーチャーのコメントから教師自身も学んだことを述べ、これからの見通しをもたせるようにする。	（全）（個） 全体でこれからの見通しを確認するとともに、個人的には具体的に何をするべきなのかを確認させる。

【補足資料】（表 2）の指導過例に関して

留学生 1 人に対して 2 つのグループから成る小グループ活動を実施するにあたって、生徒が考えているインタビューもおおまかな内容は、事前に留学生に図 3 のように伝えている。これは、テーマによって英語で表現することが難しいグループがあり、当日指導者がトランスレーターになりうることが予想されたので、それを避けるために行った。また、中学校 1 年次の英語力には限界があるが、英語を使おうとする生徒が多いことも伝えてある。コミュニケーション活動の過程で日本語を使用したとしても、自分たちの思いを伝えたり、相手を理解するために使用したものならば、充分価値があると考えて支援したい。

表３「留学生の情報とグループ編成」

	名　　前	読み方	出身国	性別
A	Mary　Nambindo	メリー　ナンビンド	Kenya	女
B	Matias　Gomar	マティア　ゴマ	Argentina	男
C	Ana　Perez	アナ　ペレス	Venezuela	女
D	Sergey　Strokov	セルゲイ　ストロコフ	Russia	男
E	Cesar　Velazquez	セサル　ベラスケス	Mexico	男

	交流する留学生名	テーマ名（音楽グループ）	テーマ名（社会問題グループ）
A	Mary　Nambindo	ゴスペル	社会問題全般
B	Matias　Gomar	リパブリック賛歌	３人の功績
C	Ana　Perez	ジャズ①	黒人差別
D	Sergey　Strokov	ラップ	ジョン・ブラウン
E	Cesar　Velazquez	黒人霊歌／ジャズ②	リンカーン

《授業の実際》

表３のように「社会問題」と「音楽」という２つのテーマを兼ね備えたグループ編成をすることで、お互いの課題を共有し、共感できる環境を設定することで、考え方がより深まったように思う。当初は、グループごとに調べて考えたことを発表し、留学生からの感想を聞く予定だったが、実際のコミュニケーションの場面では、テーマ以外にも、今まで習ってきた英語の構文を使った自己紹介をしたり、留学生自身の話を聞くことに興味を持った生徒が多く、その話にあいづちをうったり、うなずいたり、笑ったりするなど、会話が弾んだグループが目立った。留学生たちの細かい情報は、当日まで分からなかったために、グループ分けについては、指導者がランダムに振りわけていたが、偶然にもゴスペルを歌うことが趣味であるケニア出身の留学生（写真下）が、ゴスペルをテーマにしたグループにあたり、ともに歌うことで、大変心が通じ合い、気持ちを共感することができたとのコメントを頂くことができた。中学１年生のこの時期に、英語を使ったコミュニケーションは難しいように思えたが、生徒たちはジェスチャーや、アイコンタクト、歌などを使いながら、精一杯自分を表現していた。

（２）中学校３年生の実践例「単元：英字新聞をつくろう」について
～英字新聞をつくるためのインタビュー活動を取り入れた実践～

《単元の背景について》

本校は３年前にアメリカ合衆国ノースカロライナ州のマーチンミドルスクールと姉妹校提携を結んでいる。両校の教員がお互いの学校を行き来した後、２年前からペンパル交流を行ってきた。また、昨年の１月にオーストラリアから教師団が本校を訪れた際にペンパル交流が始まり、現在２度目の返事が現中学

3年生宛に届いている。さらに今年の10月からはザンビアの中学校ともペンパル交流が始まり、中学2年生と中学3年生を中心に、「書くこと」を中心とした表現活動を行ってきた。本単元は書くことを中心とした表現活動を発展させたもので、次の要素を含んでいる。

○双方向のコミュニケーション活動が成立する。

○パソコンや本・資料を活用しながら、交流相手の情報を収集する。

○交流相手へのインタビュー活動を通して、知り得た情報をまとめ、それを表現する。

《単元について》

英字新聞を作って、集めた情報をまとめるのがこの学習の目標である。双方向のコミュニケーションを成立させるために、留学生との交流学習を計画した。その際に留学生に質問して情報を得る「受信型活動」と自分たちの学校生活を伝える「発信型活動」の2つの活動を班活動で計画した。相手の国に対して関心のある「テーマ」を1つ選び、本やインターネットを利用して情報を集めたり、インタビューをして留学生の国に関することを明らかにしていった。そして交流を通して考えた3国の相違点を知り、自分の意見や考えをまとめて表現する活動へとつなげていくことができる単元である。

《単元の目標》

○交流学習を通して、分かったこと・考えたことなど自分の意見を載せた英字新聞をつくる。

○附属三原中学校3年生の学校生活を伝える。

○グループごとにあるテーマにもとづいたインタビュー内容を考え、質問して記事にまとめる。

○グループで設定したテーマにそって、スリランカ、ルーマニア、日本の3カ国を比較検証し、自分個人の意見を日本語と英語でまとめる。

《学習計画》（全13時間扱い）

12月　2日　交流学習に向けての説明　英字新聞のテーマについて説明→テーマ決定

12月　3日　情報収集①

12月　9日　情報収集②　交流学習当日の流れ確認

12月 10日　第1回目の交流（スリランカ出身男性）

12月 12日　アンケート実施（成果と課題）次時へ

12月 15日　情報収集③

12月 16日　本校ALTによるスペルチェック

12月 17日　第2回目の交流（ルーマニア出身女性）
　　アンケート実施（成果と課題）

12月 18日　授業終了

冬休み（12月19日～1月7日）課題のまとめ→新聞下書き作成

1月 13日　下書きの交流①～②および新聞作成①～③（5時間確保）

2月 中旬　まとめ（発表）→留学生に英字新聞を送付→感想を聞く予定

（3）生徒の現状と授業の実際

生徒の実態としては、実際に外国人と会って英語で話す機会はほとんどなく、現在は3週間に1度本校のALTと英語活動をするにとどめており、コミュニケーション活動をするまでには至っていない。また、英語のみを使って留学生とインタビューをする経験がなかったために、双方向のコミュニケーションに対する姿勢や考え方が事前に押さえきれていなかったという反省がある。1年生においては、当初か

ら予測していた通り、この時期の学習段階においては、英語を主としたコミュニケーション活動は期待できなかったが、実際にはボディーランゲージを中心とした意思疎通を行いながら、かなりの工夫を凝らした交流が目立ち、「交流できた」感じた生徒が多かったようである。

一方 3 年生においては、留学生の出身国であるスリランカとルーマニアに対する認識度が低かったために、事前の情報収集にかなりの時間を要した。また今回の交流学習は、英字新聞を作るための聞き取り活動として位置づけたこともあり、60 分の交流時間ですべてに答えてもらうことができなかった。しかしながら、留学生とは授業以外にも昼食や掃除時間を共に過ごす中で、多くの生徒が英語を使って話をする努力をしていた。その一方で、英語を聞き取る力がないと感じた生徒も多く、今後の英語学習に対する必要性を感じた生徒が多かった。インタビューによる交流学習で、課題を充分に整理しきれなかった部分は、冬休みの課題とした。

2 度の交流学習を終えて生徒が考えたこと、感じたこと、学んだことを一部抜粋する。

(表 4) 「交流を終えて学んだこと」(交流新聞の下書きから一部抜粋)

・私が今回の交流で特に学んだのは人への接し方です。英語が話せないからといって黙っていては会話は出来ないけど、知っている単語や文法を間違いを恐れず話しかければ、その一生懸命さが伝わって笑顔で返事をしてくれます。国や文化が違っても接する態度に気持ちがよく現われていればコミュニケーションはとれるということが分かりました。また、日本の文化について説明しようと思っても、よく知らないので出来ません。交流する上でまず、自分の国について知っておく必要があると思いました。

・ 日本と距離の離れている国でも日本との共通点が数多くあることを知って、以外と世界は狭いんだなと思いました。外国の人にでも、自分の素直な意見が英語で言えるようになりたいです。

・ ルーマニアもスリランカでも日本語の授業があることには驚きました。私も英語以外の言語を学びたいと思いました。これからも外国の学校や外国の人たちと交流しあって、文化を教え合いながら、それを共有していけたらいいなと思いました。

・ コミュニケーションをとる場面でやってはいけないことや、気をつけないといけないことがよく分かったと思います。例えば「目を見て話す」「反応する」という基本だと言われていることですら、実際にはとても難しかったです。(1 度目の交流の後に) クラスで反省点を出して、2 回目の交流は良いものにしようと考え、改善することができ、良かったと思います。(中略) 国際コミュニケーションは思ったより大変で失敗も多くありました。でもその中で、どうすれば気持ちが伝わるか、分かりやすいかなど自分たちで反省し、改善でき良かったと思います。

・やはり、コミュニケーションは難しいと実感しましたが、この国際コミュニケーションという授業は必ず次につながるステップアップだと思うし、いい思い出になると思います。いい経験をしました。

（３）学習意欲と表現力を高めるのに必要な力に関する調査

上記①②の取り組みはいずれも、新領域国際コミュニケーションの時間の学習に対する生徒の意欲・関心および、コミュニーションをするにあたって、表現力を高めるのに必要な力の中身を明確にするために実施したものである。実施にあたっては、次のような仮説（表 5）をたてて実践し、アンケート（図 1）を実施した。その内容は、中学 1 年、中学 3 年ともに同一のもの使用し、4 段階試問と 2 段階試問と記述の 3 種類で実施した。

（表 5）

【意欲・関心に関すること】

○パソコンや本・資料を活用しながら、交流相手の情報を事前収集し、交流する機会を持てば、他国への興味・関心が深まるであろう。

○他文化に興味を持ち、意欲的にかかわることができるであろう。

【表現力に関すること】

○ 意見交流する活動を通して、自分の意見を持つことができるであろう。

○ 自分の考えを表現するためのコミュニケーションの在り方や方法を理解するであろう。

○ 交流相手へのインタビュー活動を通して、双方向のコミュニケーション活動を意識するようになるだろう。

（表 6）

1. 留学生との交流にむけての「意欲は？」
2. 交流に向けての「準備は？」
3. 交流をして「どんな印象を持ったか？」
4. 交流をして「新しい発見・学びがあったか？」
   →何を学んだか？（記述）
5. 交流をして「面白さ・楽しさがあったか？」
6. あなたにとって外国人と交流学習をすることは？
7. 交流学習をする上で英語が必要か？
8. 交流学習をする上で必要な力は？
9. あなたがすでについていると思う力は？
10. これからつけたい力は？
11. 少しでも自分から会話しようとしたか？
12. あなたにとって新しい発見があったか？
    →「その新しい発見とは何ですか？」（記述回答）

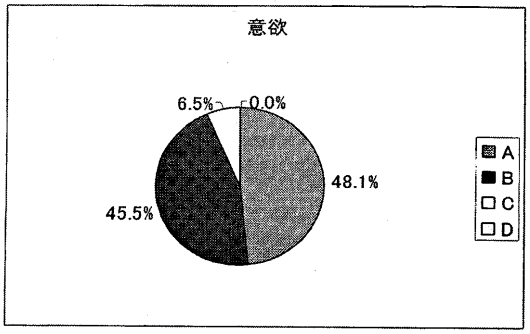
（図 1）「1. 交流に向けての意欲は？」（関心・意欲）

A:大変よかった　B:まあまあよかった　C:あまりよくなかった　D:全くよくなかった

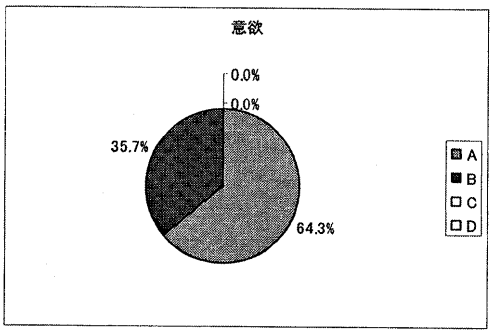
中学 3 年生→A: 48.1%　B: 45.5%　C: 6.5%　D: 0%

中学 1 年生→A: 64.3%　B: 35.7%　C: 0%　D: 0%

【中 3】



【中 1】

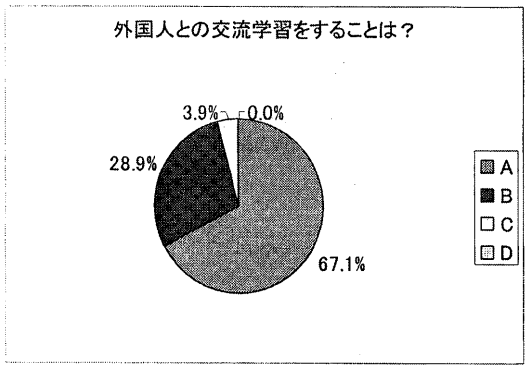


(図 2)「 6. あなたにとって外国人と交流学習をすることは？」(関心・意欲)

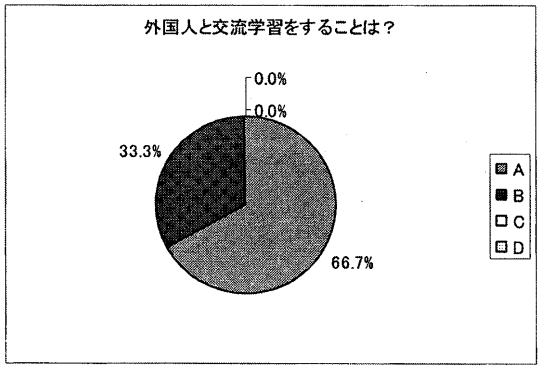
A:大変よかった　B:まあまあよかった　C:あまりよくなかった　D:全くよくなかった

中学３年生→A: 67.1%　B: 28.9%　C: 3.9%　D: 0%
中学１年生→A: 66.7%　B: 33.3%　C: 0%　D: 0%

【中３】



【中１】

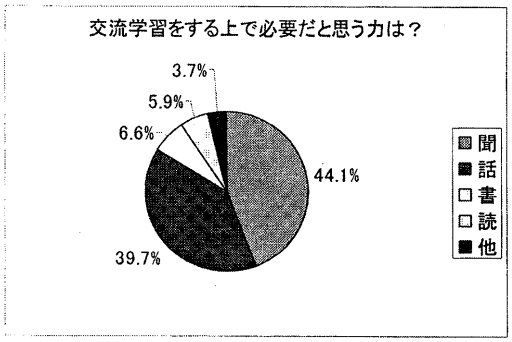


(図 3)「6. 交流学習をする上で必要な力は？」(表現力)

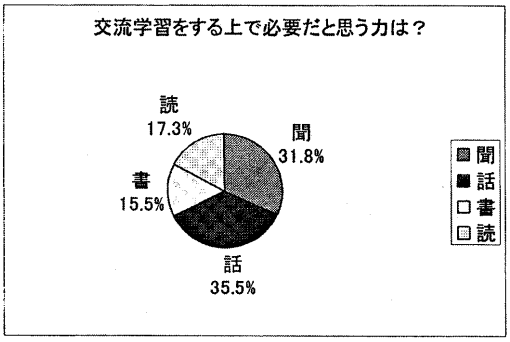
A:聞く力　B:話す力　C:書く力　D:読む力　E: その他

中学３年生→A: 44.1%　B: 39.7%　C: 6.6%　D: 5.9%　E: 3.7%
中学１年生→A: 31.8%　B: 35.5%　C: 15.5%　D: 17.3%

【中 3】



【中 1】

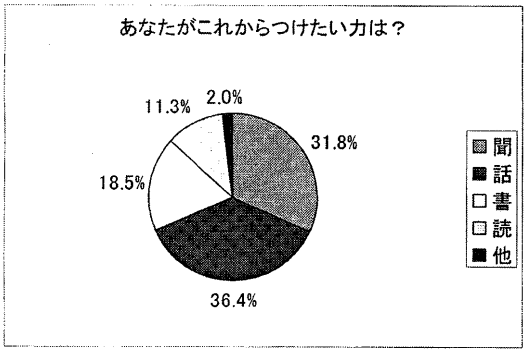


(図 4)「10. これからつけたい力は？」(表現力)

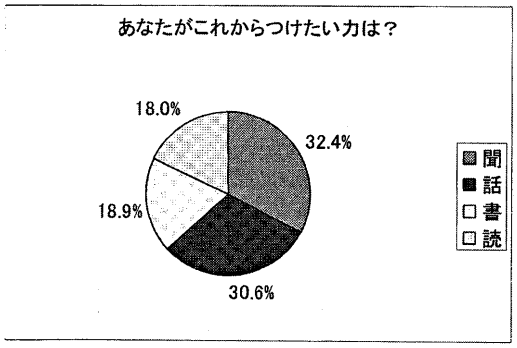
A:聞く力　B:話す力　C:書く力　D:読む力　E: その他

中学３年生→A: 31.8%　B: 36.4%　C: 18.5%　D: 11.3%　E: 2.0%
中学１年生→A: 32.4%　B: 30.6%　C: 18.9%　D: 18.0%　E:なし

【中３】



【中１】

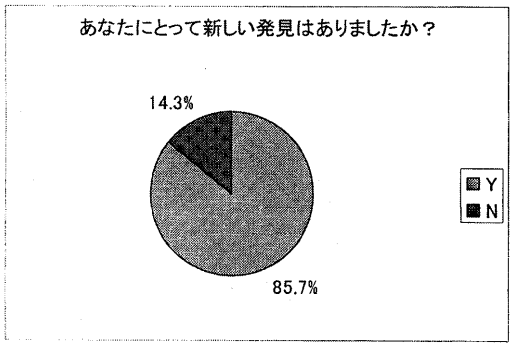


(図 5)「12. あなたにとって新しい発見はありましたか？」(関心・意欲)

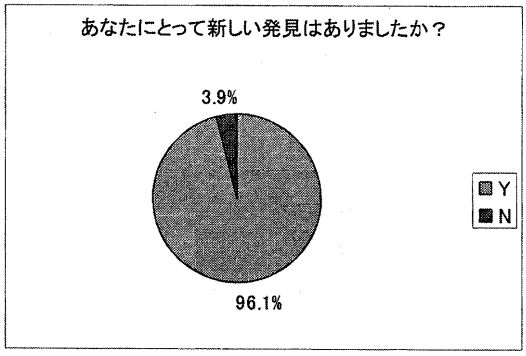
中学 3 年生→ Y: はい　96.1%　　N: いいえ　3.9%（3 人）

中学 1 年生→ Y: はい　85.7%　　N: いいえ　14.3%

【中 3】



【中 1】



(表 7)「12.新しい発見とは何ですか」(一部抜粋)

【異文化関すること】

- 異文化交流の難しさと楽しさ。
- 日本とちょっと違うにおいがした。
- 国が違っても言葉が通じればどんなことでも達成できるということを発見した。
- 日本とは共通点もあれば全然違うところもあることが分かった。
- 外国の人と交流するのはやっぱり楽しいことだと思った。知らない国の人と交流することで、その国の文化が知れるからとてもためになると思った。

【英語に関すること】

- 英語で会話することってとても楽しいと改めて思った。難しいし、分からないからこそ楽しい。
- 咄嗟に話そうとしても辞書とかがないと話せないことに気づいた。
- 結構聞いて分かる単語があった。
- 全然聞き取れなかった。もっと力を付けるべき。
- 共通で話すことができる英語はこれからすごく大切なんだなぁと思った。
- 英語は世界で通用する言語だなぁと改めて思った。

【コミュニケーションに関すること】

・コミュニケーションをとる場面では、アイコンタクトをし、少しでも聞き取ろうとする態度や積極的に英語を使おうとする態度が必要だと思いました。逆に相手の話を聞こうとしない態度やリアクションをしない、はっきりしゃべろうとしない態度は相手に不快な思いをさせてしまうと思います。相手の国についてしっかり学ぼうとする態度で交流学習を行うべきだと思いました。

★「新しい発見がなかったわけは？」(3 人記述回答)

- 自分から話しかけたりしなかったし、聞き取れなかったから。
- ランジャンさんに質問したときに英語が全然分からなかったから。
- 国によって違う雰囲気があった。

（4）アンケートの分析とその考察

①意欲・関心に関すること

(図 1,2)には学習に対する意欲・関心と学習する意義を示した。中 3,中 1 ともに交流学習に対する「意欲・関心」が高く「外国人と交流学習をすること」に対して大変よかったと感じている生徒が多い。(図 5)では交流学習を通して「新しい発見」有無と、(表 7)でその内容を示した。生徒の考える学習する意義を調査したところ、ほとんどの生徒が新しい発見があったと答え、内容を分類すると「日本と他国を比較して分かったこと」「英語に関すること」「コミュニケーションに関すること」の大きく３つに分かれた。特に、コミュニケーションの場面で必要な態度や姿勢についての回答が多数を占めた。このことから直接的な外国人との交流学習は、生徒の学習意欲を高めるとともに、新たな目標を設定させる機会となり、結果的に生徒の学習意欲を高めていることが考えられる。

②表現に関すること

図 10,11 では表現力とその理由について調査した。コミュニケーションの手段として英語を使用した場合に、生徒の多くは交流学習をする上で必要な（英語の）力とは、「聞く力」「話す力」であると回答した。その内訳として、3 年生は聞く力が、1 年生は話す力が一番必要だと答えた。聞く力を主張した 3 年生の理由としては「相手が言っていることが分からなければ、何を話していいか分からない」「相手の言葉を聞き取り、理解しないと、自分の考えを表現することは難しい」というものであった。一方 1 年生は「話をしないとコミュニケーションは始まらないから。」と大半が話をすることがコミュニケーションであると捉える傾向にあった。

③成果と課題

今年度実施した 3 年生、1 年生の単元はいずれも、英語を使ったコミュニケーション活動を前提とし、その活動の一環として「伝えること」と「相手からの情報を受け取る」という 2 つの要素を取り入れ、さらに知り得た情報を整理し、自分の意見や考えをまとめる活動であった。留学生から情報収集をするためには「コミュニケーションの手段としての英語」の使用が余儀なくされ、生徒にとっては英語力の獲得、特に「聞く力」・「話す力」の必要性を感じさせた場面が多かったように思う。中でも中学 1 年生レベルの単語力をもっての英会話は、実際かなりの困難を予測しての実施だったが、実際の言語の使用場面では、「苦痛や不安」を感じるどころか、英語と日本語とジェスチャーを使用すれば、何とか相手に自分の思いを伝えることができると感じた生徒が多かったようである。中学 3 年生においては、交流学習をする目的とその意義を明確にし、生徒にとって身近で関心の高いテーマをグループで設定させたことで、課題発見学習的な形態で学習が進めることができた。また課題発見のために設定した交流学習では、意欲的にその答えを探ろうと取り組む生徒の姿が見えたように思う。

今後の課題は、交流学習の継続および発展性のある学習内容の開発である。単発的に行うのではなく、生徒の実態に即して国際的なコミュニケーション能力を身につけさせるための単元開発が必要であり、その評価に対する考え方も明確に示す必要がある。また、交流学習をする際には、十分な準備時間の確保と交流相手の背景である出身国の事前調査が

必要不可欠である。交流相手の背景を学習し、他国の文化や考え方に出会うことを通して、自国を理解し、自分を理解することにつながる。自己を表現するには、自分を理解し、自分を取り巻く人々・社会・国を理解しなければ、語る内容を形成することは難しい。また、交流学習を位置づけるためには「双方向のコミュニケーションを成立させる際に求められる姿勢・態度」についても考えさせる必要がある。